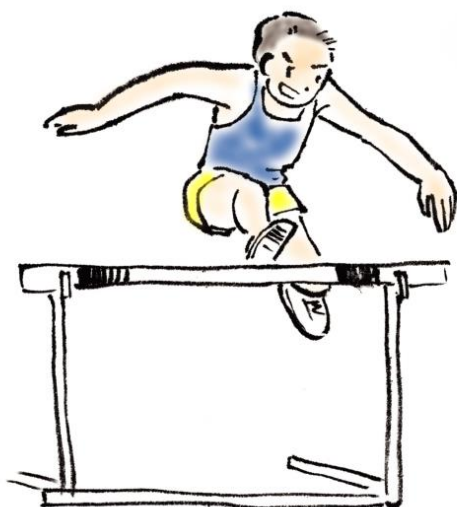


文芸研ニュース

2021年7月30日

—NO. 158—

発行 文芸教育研究協議会
編集 文芸研事務局



目次	
巻頭 上西委員長より	1
各分科会より	4
サークル近況報告	14
青年学校便り	15
事務局通信	16

新体制で文芸研運動の

さらなる前進を

上西信夫

文芸研委員長退任の辞

「文芸研委員長として七（九）年。その前の副会長・幹事会代表幹事として十五年。その前の事務局として十二年。私の教師人生は文芸研とともにありました。ただただ長く、西郷先生の、加藤先生はじめ先輩諸氏の背中を追って、多くの仲間とともに文芸研にかかわってきましたが、七〇（七二）歳を迎えた今、規約に則って役職を解いていただくことを願っています。二〇年間にわたり務めました「教育のつどい」（全国教研集会）国語教育分科会共同研究者の任も七〇歳定年制により退任します（しました）。退職から一〇年も経ちますと現場感覚がなくなり、知力・体力も衰え、完全に賞味・消費期限切れです。これを期にすべての教育研究活動の一線から身を引く所存です。

文芸研だけでなく民間教育研究団体にとって冬の時代に、一線から身を退くのは心苦しいのですが、

新しい仲間の台頭を期待して解職を願うものです。運動体組織としてもその方が健全な姿だと思っています。

新たな役員体制のもと、今の時代にふさわしい文芸研運動の展開・発展を願っています。

二〇一九年八月三日 上西信夫

右記の退任の辞は、七〇歳になった二〇一九年の鹿児島大会で表明する予定で書いたものです。その後二〇二〇年五月実践研全国委員会・代表者会議で議題としてあげ承認をお願いする心つもりでしたが、コロナ禍のため中止となり、この混乱期に辞任することのマイナス面を考えて今に至りました。ウィズコロナ時代、ポストコロナ時代の情勢に負けない運動を構築するために、全国委員会・代表者会議が中心になって新役員体制を組織しスタートすることを期待しています。

今年五月八日のオンライン代表者会議で役員改選のことを話題にしましたのは以上の経緯からです。規約に則って三年毎に役員改選をすることが文芸研が民主的研究団体・組織体として脱皮しなければならぬ課題の一つだと考えます。役員の七〇歳定年制の履行も同じです。組織の弱体化は規約無視のズブズブの恣意的な運用から始まります。

コロナ禍でも運動を止めないために第五回大会や実践研、青年学校や代表者会議をオンラインで準備・実施する中で中堅・若手が実務能力を発揮し、会としての底上げがありました。思い起こせば私たち青年学校一・二期生（認識世代）が「若手」として運動に関わり始めた文芸研の興隆期のころ、青森・山形さんや千葉・加藤さん、福岡・麻生さん、奄美・松元さん、鹿児島・半仁田さん、岡山・佐伯さん、福山・橘高さん、静岡・五十嵐さん、山口・嶋村さん、輪島・中門さん……たちが一線で文芸研を牽引する姿を仰ぎ見ていました。やがて先輩たちに代わって私たちが会運営や実践の中核を担うようになり、文芸研の世代交代・循環がスムーズに行われました。多くの民間教育研究団体が「老人」ばかりになっていったことと好対照でした。そこには青年学校の創設・継続や意図的に若手・中堅の登用と、西郷先生の中長期の戦略があったことは確かです。今回の役員改選は今後もさらに文芸研が発展していくために避けて通れないことだと思っています。

西郷先生が何よりも大事にしていたことは、初期の《関係認識・変革の教育》論から導かれる学習と運動の統一ということでした。子どもだけが自己を変革主体に育てる対象ではなく、教師も運動の中で鍛えられ変革主体として子どもと共に育つのです。

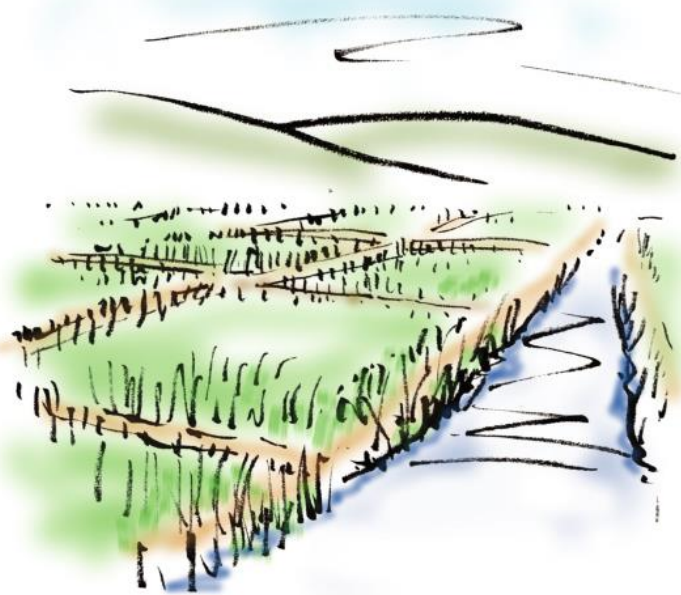
西郷先生は役や任務を割り振るとき「十分力があるから役に就くのではない。役が当人をふさわしい器に育てるのだ」とことあるごとに私たちに諭しました。

“いい授業をしたい” “子どもの味方として子どもの前に立ちたい” という誰もが抱いている理想の実現は、教室の中だけでは実現しません。職場で、地域で仲間と共に不断に、時には闘い、学習と運動を展開することでその理想に近づくことができます。先に挙げた先輩たちは、そのことの具現者でもあり、後に続く者たちの尊敬を集めました。文芸研運動のバトンを繋ぐ現役世代の皆さんも、学習と運動の統一を常に意識して追求することを願っています。

かつては、ベテラン会員の中には退職と同時にすべての活動から「引退」「隠居」する方がいましたが、それはサークル全盛期の八〇年代までの話です。大会規模もかつての二分の一、三分の一、四分の一に減った現状では、ベテランは地域で若手を育て、サークルを支え、現役組を励ます重要な任務があります。「文芸教育」誌の購読を継続することも運動を支えることになります。今、〈参事〉として多くのベテランが退職後もサークルに関わってくれていることは心強い限りです。私も第一線からは退きますが、枯れ木も山の賑わいで一参事会員として関東の地で

できることを続けていく所存です。

委員長在任中は実に多くの会員の援助と協力、叱咤激励をいただきました。どれだけ有難かったことか――。紙面を借りてお礼申し上げます。(二〇二一年七月一二日 西郷先生の月命日の日に「大虹を見上げて一人は転がれり」(朝日俳壇)熊谷市 内野修)



全国大会 各分科会から

一年生「くじらぐも」 分科会

兵庫文芸研宝塚サークル 赤穂 徳郁

初のオンラインでの全国大会がもう間もなくということで、緊張感も高まってきました。

と同時にこのコロナ禍でなかなか、全国の様子が分からないまま新しい生活様式を求められ、始まった学校生活では、今までにない対応がたくさん求められてきました。

このくじらぐもと一緒に学習した一年生の子どもたちとは、三月二日から始まる休校のため授業実践が中断してしまっただけで、学級仕舞いを余儀なくされました。当初休校は二週間のみの予定で、三月一六日には再び教室で集まって「みんなで授業の続きをしようね」と約束した子どもたちとの再会は、四月の始業式。みんなは二年生に進級していました。その後約二か月、全国一斉に休校措置が取られ、学校の機能がストップとなり、大人も子どもも多くのこと戸惑いながらもなんとか日常を取り戻そうと過ごしてきました。私自身、「全国大会はどうなるんだろう・・・」「こんな中途半端に実践が終わっ

たレポートに需要があるのだろうか」と思い悩む日々を過ごしました。ただ、ここに来るまでに多くの人たちが関わり多大なる尽力していただき、全国大会をむかえることの喜びは、なんと表現しているかわからないくらい日を追うごとに高まってきています。初の試みにレポーターとして参加させていただけなのは、なんだか自分のICTスキルが何倍もレベルアップした錯覚にも陥ります。（私自身は何もしてないのですが・・・事務局をはじめとする多くの会員の方々本当にありがとうございます。）

「こんなこと、わたしの学校の誰も経験してないんじゃないか」と不安と緊張をかかえつつも成功した時の高揚感を想像して本番までの日々をカレンダーにとらめっこしながら過ごしています。誰も経験したことがないからこそ、何でもチャレンジが可能なのかもしれませんと捉えることもできます。わたしは、発表会や音楽会などの本番前に子どもたちに「今までの練習や、積み重ねは絶対無駄じゃないから、全力で楽しんでおいで」と声をかけることがあります。なんてありきたりで、恥ずかしい言葉だと思わずにはいられない言葉ですが・・・この全国大会をむかえるにあたって、慣れないズームを使いこなせるようにオンライン学習会を積み重ね、何度も打ち合わせを重ね、一年の全国大会の延期を決断しながらも、

その多くの時間がこの八月一日の全国大会のために費やされてきたことを思うと、あとは悪あがきをせずに「楽しむ」しかないのではと、半分開き直っています。

子どもたちのために、様々な経験を持った方たちと学びあうことの楽しさを、「文芸研つてすごい！いつか自分もあんな授業をしてみたい！」とはじめて文芸研と出会って覚えた感動を、このオンライン大会でも「やっぱり、みんなで学びあうことは楽しい」と感じられると確信しています。

最後になりましたが、全国オンライン大会が開かれる八月一日は「花火の日」だそうです。日本人は江戸の頃から花火に鎮魂や慰霊・疫病退散の願いを込めてきたという歴史があるそうです。ドカンと大きな花火が打ち上るように全国各地の先生方が力を尽くしてくださったからこそ、中途半端で途切れてしまったけれども、「くじらぐも」がお蔵入りすることなく陽の目を見る機会に恵まれました。本当にありがとうございます。そして当日もよろしくお願ひします。

三年生「モチモチの木」分科会

広島文芸研 広島サークル 砂島祐子

後、1か月もたたないうちに全国大会です。

今まで全国から集まっただけの夏の学びは多くのことを学習でき、しかも面白いので、毎年の楽しみでした。

しかし、コロナ感染で昨年は全国大会ができず、残念な思いでいましたので、今年の開催は待ち望んでいたことです。

昨年の2月、コロナ感染で思いもよらぬ急な全国一斉休校となりました。

提案者の吉田さんは、「モチモチの木」の授業の真っ最中でどうなるかと心配しましたが、休みに入る前の2日間で典型化まで終わらせることができました。これは、やはり吉田さんが、4月の子ども達との初めての出会いの日から、子ども達の豊かな成長を願い、授業や学級経営を大切にしてきたからだろうと思います。授業の仕方や学級経営を大事にして子ども達と向かい合っていると、以前の学びが次の授業に生きてくるし、また、日頃の子ども達

の互いに思い合う姿勢にも生きてきます。このことは、今回の授業記録にも表れているので、分科会でそれらに触れられればと思います。

今年はオンラインによる全国大会です。オンラインは、ネットの繋がる所なら全国の人どころか全世界の人とも自分の居るところから即時、繋がることができる便利なものです。

でも、オンラインによる分科会は、初めての経験なので、うまく分科会を進められるか不安と心配でいっぱいです。

これまでの分科会では、多くの人を前に話す時は、聞く人の頷きや首の振り方で、これは内容を分かっている聞いてもらっているなど思っているを進めていました。しかし、不思議そうな顔が見えたり、首をかしげられたりする様子を見ると、これはもつと説明があるなど思っている話したり、違う言い方をしたりすることできました。あるいは、こちらから質問をして（時には指名して）確認したり、内容を深めたりすることもあったのですが、オンラインでこういうことができるのだろうかと思えます。みんなが、「ギャラリービュー」で、「自分の映像」で「ビデ

オ付きで参加」であれば、少しはこれでもできるのかなあと思ってみたりもします。

また、これまでの分科会では、一つの教材に一日かけていたものを今回は約100分でしなければいけないという時間の制約があります。ある部分を重点的にということですが、ある程度はその教材の全体像、つまり、その作品における文体の特徴、認識の方法などを押さえた上でその場面に切り込んでいかないと内容を深めるには少し難しいかなと思います。全国大会までにはかなり検討しておかなければなりません。

それから、ネット利用に詳しい先生が増えてきているとは思いますが、やはり、セキュリティなどの心配やコロナ禍の中の先生方の繋がり難しさ（全国大会の宣伝が難しい等）から、オンライン参加の人がどのくらいあるのだろうかと思っています。

一日も早くコロナ感染が収まり、来年には今まで通りの全国大会が行われますよう願わずにはおれません。

初めての提案で見えた風景

〈文芸研のチカラ〉

千葉松戸サークル 沼澤 賢

今大会において初めて提案させていただきました。提案させていただいたことで自分の力のなさを知るとともに、文芸理論の確かさを実感しました。そして、国語だけにとどまらず、教育全般に通じる考え方であることもわかり、日々の教育活動においても助けられました。

2年前に、「提案してみませんか。」と打診を受けた時には、正直迷いました。しかし、サークル員のすすめにより「やることを決意しました。」

「ごんぎつね」は、国語教材の定番であります。そのため、先生方の「ごんぎつね」に対する分析・解釈は鋭く確かなものであり、安易な提案は出せないと思いました。しかし、そうとはいっても何をどのように分析・解釈そして授業構想を書いていけばよいかよいか全くわかりませんでした。その中でまず手がかりとなったのは、これまで提案されたレポートです。先輩たちの英知を手掛かりにして、まねをすることから始めました。書いていくうちに分かつ

てくると思っていたのですが、理解し、そして腑に落ちることがなく、悶々としたレポート作りの日々でした。もともと理解したり、実感したりするのに人の何倍もかかる頭なので、これでは「まずい！」と思いました。それでも、なんとか形にしなければと思い、気合いを入れ直し、形にすることができました。

そしていよいよ授業です。文芸研には、教授Ⅱ学習過程があります。当時は、その意味がよくわかっていませんでした。そのような中で、授業を進めていくわけですから、あつちにいたり、こつちにきたり、まさに右往左往した上に、迷宮入りをしたことが何度もありました。サークルの仲間に相談させていただき、授業を修正する場面もありました。授業が終わり、レポートが形になってもなお、「ほんとうにこれでいいのか。」という不安や迷いがありました。そのような時だからこそ、救いとなったのがサークルの仲間の言葉です。「今回の提案は、いろいろさまよっている部分もあるけど、子どもが素直に語っていること、そして、何より、包み隠さず全部出しているのが誠実でいいと思います。」本当に救われました。そして、何よりもここでなら「本音」を語れると思いました。自分の教師としての居場所がここにもあることに気付いた瞬間でもありました。だ

からこそ、仲間を増やしたいとも思いました。

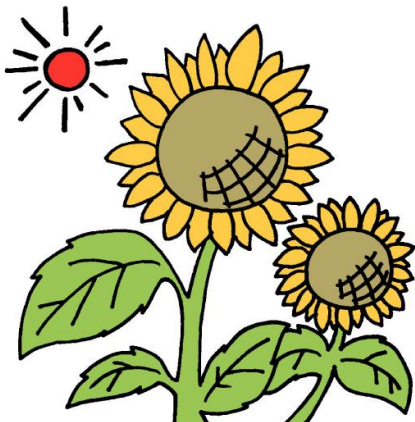
この初めての提案で一番に感じたことは、子どもが成長するということです。文芸研の理論で授業をするだけでなく、自分自身の指導の思想とすること、こんなにも変わるのかと思いました。授業の中で発言からもわかりましたが、このコロナ禍において提案までの時間が延長されたことで、長期的な目でみても成長がわかりました。当時4年生だった子どもたちも、今は6年生です。現在、自分は担任をもっています。たまたま通りかかった6年生の「川とノリオ」の授業で、「青い世界はどのような意味か。」という授業をしていました。思わず教室に引き込まれてしまいました。黙々と考えているところでした。4年生の時に、担任をした女の子に声をかけると、「これってごんの青いけむりでやったから、なんかわかる。」と言ってくれました。「ごんぎつね」の青と「川とノリオ」の青は、響きは合わないと思いますが、その子の学びの中で響き合わせて考えていたことに驚き、しんとしている教室の中で、自分の心の中に嬉しさがはじけました。

初めての提案で得たことは、やっぱり授業をつくり・実践するのは大変だということです。しかし、その分、自分自身も子どもたちも大きく変わることができます。登場人物が変化発展していくということ

は、文芸研ではお馴染みの考え方ですが、そこに真正面から向き合う教師も子どもたちも変化発展することができ、させていくことができると思わせてくれた経験でした。

今回は、文芸研の歴史の中で、初のオンラインとなりました。初めは、本当にできるのかと心配でした。知恵をもちより協力することで乗り越えられないことはないんだと思いました。このような活動を支える文芸研のチカラは、一朝一夕でなせるものではなく、これまでの歴史と一人一人の運動によるものだと感じました。このような組織の一員として自分も仲間になれたことに誇りとともに責任をもつことができました。この度運営を支えてくださった、全ての皆様

に感謝を伝えたいと思います。
本当にありがとうございました。
そして、これからもよろしくお
願いします！



『大造じいさんとガン』の見どころ

山口文芸研・山口東サークル 清田和幸

2年ぶり、初のオンライン開催となる文芸研の全国大会。レポーターの皆さん、2年間のびのびとなった発表、お疲れ様です。

「大造じいさんとガン」のレポーターである松山幸路さんも、全国大会を今か今かと待ち続けておられたことと思います。

2年前の実践となる「大造じいさんとガン」のレポートなんですが、授業に対する意気込みはともても意欲的かつ、誠実な実践です。この教材は、全ての表現（漢語表現、文語調の語り、声喩、情景描写、比喩など）がすべて、大造じいさんの人物像とひびき合っている文芸作品です。そのじいさんから見た残雪のイメージ、作品世界のイメージを教材分析では、ていねいに分析されています。

また、授業では松山さんらしい、軽妙な大阪弁で子どもたちとのやり取りから、日ごろの、たのしくてあたたかな学級づくりが見てとれます。

そんな子どもたちと、「大造じいさんはどんな人物だろう？」や、「大造じいさんは、残雪をどう見ているか？」、「大造じいさんの言っている（ひきような

やり方）って、どういうことだろう？」など、教師と子どもたちが、あーでもない、こーでもないと言語合っていく授業は、「単元を貫く言語活動」などというまやかしの授業とは一線を画す、本来の国語の授業の姿を見せてくれています。特に、会外の若い先生方に見てほしい、実践です。

また、まとめみでも子どもたちは自分なりの意味づけをしており、「相手を豊かに理解すること、相手への見方を変えることができ、自分自身をもよりよく変革していく」という認識の内容をしっかりと学べたことがうかがえます。

ですが残念なことに、今回の大会では、「分科会の時間が圧倒的に少ない」という問題点があります。教材分析も授業記録も、どうしても、部分的にかいつまんだの分科会運営にならざるを得ませんし、初のオンライン大会ですから、参加者の皆さんにどこまで、松山さんの実践のよさや文芸研の授業のたしかさ、西郷文芸学のすばらしさをどこまで伝えられるか不安は尽きませんが、オンラインだからこそ、日ごろなら大会に参加されない方にまで文芸研の授業を伝えられるチャンスととらえて、できることを精一杯やっついこうと思っています。

全国大会に向けて

沢山の学びがありました

東京サークル 小松小百合

いよいよ来月にオンライン全国大会が近づいてきました。正直、二年間は長く、自分の力不足を痛感し、まだ学ぶべきことが多いことを教えていただき、落ち込むことの多い日々でしたが、どうにか今日、教材分析と授業実践のレポートを送付し、当日に向けてのカウントダウンが始まった感があります。自虐的なことばかり並べても仕方がないので、今回のレポートを通して、学んだことを書き綴っていききたいと思います。

※ 今回の教材「少年の日の思い出」は本当に中学一年生の教材として、扱いづらいと思い続けてきた作品でした。その作品に挑戦したいと思ったのは、田中みどり先生のハンドブックの中で、西郷先生が《美》の問題を指摘されていたからでした。その観点からこの作品を分析し、授業をしてみたいというのが出発点でした。以前に石野訓利先生の実践を西郷

先生が褒めていらつしやるのは知っていたので、違う切り口で挑戦してみたいと考えたのです。しかし、それが私には無謀な挑戦でした。）

1 《美》って何かわからない。

授業者の私がわからないのだから、生徒にわかるはずはありませんでした。実践研でも、多くの先生に指摘していただいても、なかなか理解できないままに授業実践へと突入しました。今、再度時間をいただいて、授業分析の中でやっとこのことを指しているのだということが見えてきた気がしています。上西先生をはじめ、石野先生・辻先生・曽根先生・田中先生……。多くの先生方が一緒に悩んで（私に理解させるのを？）いただいたこと、感謝の思いで一杯です。今は、少しでも三学期、再度授業をするのが楽しみになりました。

2 授業は設問が命

「この質問は読解になっているよね」「こここういう質問はどういう意図があるの」「《対象人物》の気持ちを聞いても、答えられないよ」……。五月締め切りも過ぎ、六月に入っているのに、石野先生から何度もレポートを推敲していただきながら、

伺ったフレーズです。授業実践では、《視点》を踏まえていないので、脱線・誘導するような発問を繰り返して、今までの課題を越える授業にはなりません。それでも、学んだことは（この年になって情けない限りですが）生徒への発問次第で、授業は大きく変わっていく可能性をもっているということでした。確かな教材解釈に基づくふさわしい設問を投げかけていたなら、生徒たちはその設問に答えられたのということです。

生徒の気づきの種を育てるためには（生徒に自分の考えを語らせ、授業で、教室でそれをみんなで共有するためには）、「どこからそう思ったの」と教材に沿いながら、根拠を挙げさせることが大切であること。《ものの見方・考え方》という武器を生徒が使えるように示し、育てていくことがなければと痛感しました。そういう道筋を文学的な文章を読む中で、しっかり育てていくことが、生徒の考え方の深まりを生むのだということを、教えていただきました。

コロナ禍で最後の部分ができなかったことはありますが、生徒と時間をかけて《同化》する体験をやるべき時にやっておかなければ、さらに《異化》することもできないということもわかりました。

以上、反省ばかりの原稿ですが、二年という時間が濃密なもので、沢山の学びがあったことに感謝して、全国大会を迎えたいと思います。

（詩入門）津軽だからこそできる提案を

青森文芸研津軽サークル 秋元 須美子

文芸研で学習を始めたころ、青森にサークルを作った先輩たちによく言われたことがあります。「切実な体験抜きに人は変わることはできない」ということです。そのために、「寒い場面では体が震えてくるような、温かい場面では体がポカポカするような、そんなイメージ体験をさせなきゃいけない」と何度も何度も言われました。うまくはできませんでしたが、振り返ってみると、津軽サークルでは共同体験することをずっと大切にしてきたような気がします。

今大会の詩入門のテーマは、「確かさをふまえ豊かで深い読みをめざす詩の授業」です。これは、今の国語の授業で、一番ないがしろにされていることだと思います。とくに詩の授業は音読、暗唱、ぎっくり読んで感想を言う・・・そんな活動がほとんどです。読解することがやつと、という子どもたちはイメージをうかべることすらできません。しかも、ど

の詩も同じ扱いです。けれども、教師が丁寧に言葉をひろって示し、子どもと一緒に作品世界を体験していけば、どんな子どもたちでも自分の言葉で語り、豊かで深い読みをすることができると思います。今回の授業提案はぜひぶん前のものですが、特別な子どもじゃなくても豊かで深い読みができるということとを、参加者の皆さんに伝えたいと考えています。

とはいうものの、実は今回のオンラインの大会は不安がほとんどでした。理由は、

① オンラインに不慣れ・・・自分ではなんにもできません。

② 提案時間が少ない・・・津軽の学習会は実にゆっくりしていて、立ち止まることのほうが多いのです。全国のテンポについて行けるのか。

③ 私自身の問題・・・どんなときでも必ず緊張し、緊張すると何を話しているのかわからなくなります。

などなど。でも、「やると決まったらごちゃごちゃ言わずやれ」というのも先輩たちの教えです。がんばらなきゃ、と思っていたところに心強い味方が。詩入門のオンラインのお手伝いが、枚方の福崎さんに決まりました。津軽サークルはこれまで福崎さんにくたくさんお世話になってきました。

① 実践研で西郷先生の説明を聞いてもわからないとき、かみくだいていいいに教えてくれた。

② 西郷先生に「全然違う」といわれたとき、どこがだめで、いいところはどこか教えてくれた。

③ 私たちのレポートを丁寧に読んで、いつもの確にアドバイスしてくれる。

そんな福崎さんがついていてくれるのですから、ぜひぶん気が楽になりました。福崎さんだけでなく、枚方サークルの野澤先生にはオンラインの学習会に誘っていただき、機械に疎い津軽サークルでもなんとかなるということがわかりました。

心配はいろいろありますが、大会ができるのはうれしいことです。いつもは参加できない仲間が参加できるというのもうれしいです。参加の形も津軽らしく、何か所かに分かれて集まってしまうことになりそうです。この大会が成功するように、私たちは私たちのできることをがんばります。

作文教育入門のレポーターとなって、

学んだこと

千葉文芸研 松戸サークル 秋山亮介

初めての作文教育入門のレポーターとなり、1年生担任と言うこともあって、どのように、「書くこと」に親しませるかということを意識して実践してきました。そして、今まで文芸研で学んできたとおり、認識と表現を両輪として、1年生なりに学ばせていくことが大切なのだという事に気づきました。1年生だから、認識できない、表現できないと言うことは全くありません。子どもたちは、1年生なりに物事を認識し、様々なやり方でそれを表現します。そういった機会を意識的に与えていくことや、教師が道を示したり、例を提示したりすることは、どの学年でもやってきたこと、「作文の実践する」と、力みすぎなくてよいような気がしました。

その中で、子どもたちは書くこと、読み合うことが大好きになっていきます。そんな実践を分科会では報告したいと思います。実践として拙い部分や反省点はたくさんあります。しかし、ありのままの実践を報告し、反省点も正直に話しながら自らも学ん

でいこうと思います。

分科会では、できる限り参加者が語り合うことに重きを置きたいと思っています。オンライン大会となり、時間の短い分科会となりましたが、作文教育について学びたい方たちが、普段感じていることや「生活作文」が大事にされていない昨今の教育現場について、共有していききたいと思っています。

今回のメインで実践報告をする子たちは、コロナ禍で、学年が尻切れトンボのようになってしまった子たちです。ですので、学年の振り返りをする時間はとれませんでした。しかし、その次の年も運良く1年生を担任したこともあり、レポートの中に「コロナと子どもたち」という項を増やしました。次の年の子どもたちの生活作文の中には、コロナ禍が見え隠れしていました。子どもたちの作品を通して、コロナ禍と子どもたちの教室、生活を語ることで、きる分科会でもあると考えています。

参加者にとってよい学びの機会になるよう、そして、文芸研の良さに少しでも気づいてもらえるように、司会者の辻先生と良い分科会にしていきたいと思っています。

サークル便り

嫌いな国語

枚方サークル 神牧英樹

私が学生時代に受けた国語の授業は、物語文であれば登場人物や作者の気持ちを読取り、説明文であれば読解指導でした。まったく面白いと思えませんでした。そして国語に対する嫌なイメージを持ったまま現場に出てしまいました。幸い今年度まで、子供に授業する機会がありませんでした。そんな中、同じサークルの安川先生に、国語の教室の存在を教えてくださいいただき参加することになりました。「この機会に好きになれたらいいな」という期待と「面白いと感じなければもつと国語が嫌いになってしまう」という不安を抱えて参加しました。

国語の教室を終え、イメージが180度変わりました。視点人物や話者の存在、それに伴っての内の目や外の目があることで、物語に自分があたかもいるような感覚になりました。帰宅中に一緒に参加した先生方と、その話をずっとしてしまいました。それだけでは飽き足らず、家に帰って家族にもこの話をしてしまいました。そこから、何度か国語の教室

に参加するにつれ、自分でも国語の授業をしたいという気持ちが強くなりました。

今年度から、五年生の担任となり、国語の授業ができるようになりました。いざ国語の授業をするこ
とが決まると、「文芸研の先生方のように面白く授業
できるのか？」という不安にさいなまれた。資料を
読んだり先輩方に相談したりして準備を進めました。
授業をしてみると、どの子も場面や段落から一生
懸命、答えを探し出し理由を発表したりノートに記
入したりする姿がみられました。子どもたちから「は
じめは、難しかったけど、楽しい」「続きがしたいな
あ」など嬉しい言葉が返ってきました。

国語が嫌いだった私が、これは面白いと心から感
じることができたのは文芸研に凄まじい力がある
からだと思います。
物事は、好きになれば、やる気や
活力は湧きません。
これかも文芸研を
研究し、子供たちが
国語を好きになれ
るように励みます。



青年学校便り

五月「意味と価値が生まれる作文指導」

(松山幸路先生)

青年学校17期 福迫 雅史

松山先生のコメントは、どれも子どもに寄り添っており、すごく温かみを感じました。

子ども同士が作文を通じて繋がる温かいクラスの様子が伝わってきてほっこりしました。松山先生自身が、「書く」ことを楽しんでいらつしやるからこそ、子どもたちも書くことの楽しさや表現方法を学びその輪が広がっているのだと感じました。子ども自身が気づいていない価値を見出すことは、なかなか難しいことですが、少しでもその宝を見つけ、返していけるように日々子どもたちと向き合っていきたいと思います。そして、「担任は読者であり作者である」ことをしっかりと意識して作文指導を行っていきたいと思います。素敵なお話ありがとうございます。

宝塚サークル・赤穂先生からお知らせです！

青年学校の夏の学習会が7月24日にありました。オンライン学習に不慣れで始まったものの、今回は野澤正美先生より宿題が出て、石垣りんの「空をかついで」をそれぞれレポート形式で報告するという初の試みで、かなり緊張感を持って挑むことができました。

西郷文芸学の理論が、まだまだわからないままスタートした青年学校でしたが、みんなの報告を聞きながら、今まで、色々な先生方にご指導頂いた視点論や、関連系統指導など、改めて振り返ることになり、鹿児島大会のあとスタートした、3人だけの17期の青年学校：も、いよいよ折り返しなんだなと嬉しいような寂しいような不思議な感覚を覚えました。不安だらけのスタートだったけれど、こんなにも仲間が集まって一緒に学習することの喜びを改めて感じることができました。17期は、オンラインでの学習が主で、まだまだ不十分な点は多々あるものの、講師の先生方の胸をかりて、着実に一步一步進んでいる実感が沸きました。

全国大会の後、8月7日(土) 19時半より定期学習会を行います。

学習教材はアーノルド・ローベル「いろいろへんないろのはじまり」（絵本）と川崎 洋「とる」（詩）で学びあいたいと思います。全国大会で、興味を持っていただいた方が少しでも参加していただけたらと思います。詳しくは、全国大会でもスピーチさせていただきます。どうぞよろしくお願いします。

青年学校17期、自主運営の良さを発揮し、試行錯誤しながら頑張っていますね。各サークルの若手、職場の先生に学習のお知らせをしてあげましょう。夏休みは、さらに学ぶチャンスです！

松山

事務局通信

熱い夏がやってきました。コロナ禍が続く中、サークル員の皆様のご協力で全国大会の開催ができることを本当にうれしく思っています。初めてのオンラインでの大会と言う事で、大会事務局も何度も何度も話し合いを重ねてこの日を迎えています。どれ

だけ準備をしても、当日何が起こるかはわかりません。でも、サークル員の皆様の力で大会を成功に導いていきたいと思います。

オンラインは、場所の条件を超えて繋がれる素晴らしいツールの一つです。また、今まで全国の移動を理由に参加できなかった文芸研に興味のある人も参加してくださることでしょう。もちろん、対面式の大会でしか感じることでできない熱量や学びもあります。西郷文芸学は、生きる力にもなる素晴らしい理論です。変化発展することはもちろんのこと、今回の条件を生かして大会を成功させて、新しい運動の一步を確かな歩みで踏み出したいと思います。今日の日を迎えることが出来たのは、全国サークルの皆様のお力添えはもちろんのこと、大会事務局として支えてくださった石野さん、西さん、松山さん、倉富さんの力があったからです。本当にありがとうございます。

お知らせ

○今年度のサークル会費の納入がまだのサークルは振り込みの方よりしく願います。

○文芸教育誌の宣伝を職場、学習会など事あるごとにお願います。サークル員が力を入れて作ったも

のです。サークル員が紹介し、宣伝し、売りでも1冊ずつ届けていきたいと思っています。皆様のご協力よろしくお願いします。

今後の予定

・2021年12月26日(月)27日(火) 冬の実践研

(まだ未定ですが、感染が下火になったり、ワクチン接種

が終われば、従来型の対面式の実践研を開く予定。終息

せず現状と変わらない時は、オンラインで実施。)

・2022年5月14日(土) 春の実践研



夏のおまけ

事務局松山としては、いつもニュースを編集する立場なので、ほとんど書くことがなくなったニュース原稿。

そんな中、皆さんの書かれた原稿をチェックしたり、修正・編集したりしていると、忙しい中でこんなに熱いものを書いてくれるんだと、いつも感激しています。いや、忙しいからこそ、内から出る熱いものがあり、溢れるのだと思います。パソコンを前にカチャカチャと文字を打つというより、その向こうに伝えたい誰かがそこにいて、相手に語っているのです。また、書くことで、自分にも語っているのです。

私は、編集の立場ですので、誤字を見つけたら直しているのですが、時に「これは訂正してもいいのか」。自分ならこう表記するけど。という箇所にあふつかることもあるのですが、そのままにしています。それはその人のストレートさがありますし、硬くなくて、作者作者の正解があるので、そのままにしています。

吾郎先生から引き継いだ文芸研ニュース企画・編集の仕事ですが、毎度毎度うまく編集できているかは分かりませんが、少なくともそれぞれの原稿の生の声は届いていると思います。さすが、西郷先生が

詰まった文芸研に関わる先生らしく、素敵な意味づけがたくさんの作者の見方。そこから、読者の私たちも、これから歩く道が照らされているのではないでしようか。

最後に、エッセイを載せます。私が夏休み前に書いた学級通信の記事です。

このくらたくんのように、自分の仕事を全うしていく自分でいたいです。また、自分の働きが、誰かに何かつながっていると嬉しいのです。

(七月十九日 学級通信より)

今、くらたくんのことを話しておきたいです。夏休みに入ったら、しばらく書けないので、今しかありません。

くらたくんは、倉田くんか、蔵田くんか、倉多くんかは知りませんが、レジを打つ時に見える名札「くらた」から、くらたくと密かに私が読んでいるだけです。彼は、担任がよく立ち寄るスーパーの店員さんです。大学生ぐらいで、一年前ぐらいからそのスーパーでレジ打ちをしていると思いますが、なぜか名札の右上には「研修中」と書いてあります(笑)。

なぜ、とある学級通信に、とある店員さんが出てくるのかというと、彼が仕事ができないからではないのです。なかなか仕事ができる人で、私がこれまた密かに一目置いているからなのです。自分が五年一組の児童で担任が松山先生ならば、

間違いないこのくらたさんの仕事ぶりを、作文帳に五ページは書くでしょう。

くらたくんは、どのお客さんにも丁寧に接客し、言葉遣いや話し方もきつと普段とは違うのだろうけど、とてもやわらかいのです。仕事の時とプライベートとを使い分けられるのも、今自分がしている仕事にモードが切り替えられているからではないでしょうか。たまに、接客のまずい店員さんを見ると、「多分、普段もこういう感じなんだろうなあ。」と思ってしまう。違ったら申し訳ないですが。

くらたくんを語る上で欠かせないのが、お釣りの渡し方です。最近、トレイを使ってお金のやりとりが増えました。個人的には、直接手と手で受け渡しするのと変わりはないと思っていますが、くらたくんのお釣りの渡し方を見ると、お客さんとして色々感じるものがあります。

このように渡そうという決まりがお店ではないようなので、そこに店員さんの個性が出ます。直接渡す人。トレイの上にお釣りを広げる人。トレイ自体をポンと置く人。こちらがお釣りを全て取るまですつとトレイを持ってきている人など。ずつと持っていてもらうのは、なかなかお釣りをサツと取れなかった時に、何か申し訳ないので、ポンと置いてもらった方が、ありがたい気もしています。

肝心のくらたくんは、持っていてくれます(笑)。彼の接客で大切にしているところなのでしょう。ただ、彼はトレイの中のコインを取りやすいよう、寿司職人が素早くシャリを作る

ように、サッとトレイの角に固めて置いてくれます。だから、それほど時間はかからずお釣りをつまむことができます。

お釣りを取ったのを見届けると、必ずあのやわらかい声で「ありがとうございました。」と、見送ってくれます。こちらも必ず頭を下げています。

ある程度の仕事ができれば、決められた時給でお給料をもらえます。とても良い接客をしたからといって、稼げるというものでもありません。しかし、くらたくんは今日も丁寧な接客に努めてくれています。くらたくんは、まさかとある学級通信に自分が評価されて

書かれているなんて思ってもいないでしょうが(笑)。くらたくんの存在を、この読者にも知ってほしかったのはなぜだかわかりませんが、いつか書きたいと思っていました。皆さんとくらたくんにとって、少しでも良い夏になりますように！

